社研・理社研公開討論会に対する文連の基本的立場と見解

12/14 文化部連合会本部

(1)「本討論会はサークルが把え持っている問題を明らかにする第一歩である。」

われわれ文連執行部は、本討論会を準備・組織するにあたって、前提として理社研が社研より分裂して形成されたサークルであることを踏まえる中で、では何故分裂したのか、その根本原因何であり、如何にすれば解決しうるのかを良いおすけ第の第一段階であることと位置づける。本討論会に結集した学友諸君、とりわけサークル系諸君は、社研・理社研の間の矛盾は、それ個有のものではなく、実は多くのサークルに内在している問題であることを見ててるべきであろう。それは、研究会指導体制・研究課題の決定方法・研究方針 etc. と各様に、われるものであるが、その各々を具体的に煮りさげる中で普遍的なものをとらえていく必要がある。

まずもって社研・理社研の歴史性を各々展開することであろうし、その過程で如何なる内部矛盾が発生・発展し、終局的には社研・理社研という形で二つのサークルになっていったのかを述べることであろう。

(2)「本討論会は相互義務を自覚した相互批判の場である」

客観的には、分裂がどちらが史を相方が持ちつつも、相手を打倒するのだ、などという低次なものにしては一切、討論会の価値を減ずることになるであろう。われわれ文連執行部としては、相方に批判を持っている社研の諸君、とりわけ前指導委メンバーの諸君に対して官僚主義的弾圧(退部命令)を行った事である。これはサークルに官僚的権力機構を設置することはサークル運動全体との間でどのような意義(悪意味)であるのかとして論じられるであろう。又理社研の諸君(退部命令を受けた学友も含め、元社研メンバーであった諸君)に対しては、何故社研から脱退したかである。たかだか一年や二年程の内部討論の結果として、退部命令を受け入れ別のサークルを作っていくというのは、余りにも安易である。もし、かかる討論会等を設定して行かなかったならば、それは、両運動史の無明延期でしかなくなるであろう。

(3) 本討論集会の意義は既に明らかであろう。69年明大闘争の敗北・学館全面ロックアウトの過程は、同時にサークル運動にとっても停滞・「サロン」への回帰の過程であった。11月24日文連委員会において選ばれた、我々新執行部は、文連の崩壊状況を再建した前執行部の意義を受けつぎ明大闘争時、及び、それ以降のサークル運動の矮小化を踏まえる中で、より強固な文連体制の構築を目指していったのである。

そして、現在われわれ文連執行部は、実力斗争の中で開放した学館に文連本部を設置して文連活動を展開している。この意味は大学当局の管理支配体制＝ロックアウト体制を粉砕していくとともに、過去の与えられた場でのサークルと明確に訣別し、われわれの"自前の運動"を構築していく重大なきっかけとしてあった。

われわれにとって、われわれが、当然の量、あるいはサークル運動において、サークル員諸君に提起する事、サークル間自身がどんな問題意識をもっているかを、らすに提起していくことは出来ないのであって、ある討論会を通じてこそ、文連執行部とサークルの間の溝をつめる作業としてあるのである。

われわれは、このような地道な作業を行う中で、文化運動・サークル運動論の全体的展開が計れる基盤を作ろうとしている。

そういった意味において、文学連の"貧困性"を通して、われわれ一人一人がいかにサークル活動にかかわっていくのかを真に問い返す場として、全てのサークル系諸君が、積極的に発言されることを強く望むのである。なお、本討論会は、第一回であり、従って、第二回、第三回を行い、さらに社研・理社研のみではなく、Aサークル、Bサークルという形でも、論争の輪を広げ、その場を保証していきたい。

本討論集会を自覚メなものとして、みちとっていこうではありませんか！